



若くしてがんになった患者が生殖の機会を諦めなくてもよい希望をつなぐがんの生殖医療「妊よう性温存」があるのを存じてしようか。

11日に滋賀医大で医療者対象の講演会「がん治療と生殖医療」滋賀県がん・生殖ネットワークが主催され、パネリストとして参加しました。「がんの予後(治療後の回復見通し)、5年生存率のパーセントによ



菊井 津多子

私は「予後がどうであれ、子供を授けられるかもしれない治療法が今、現にあるなら知らせてほしい」と発言しました。受けるかどうかは患者本人が情報を咀嚼して判断するのであって、知らされなかった後悔ほど辛いものはないと思ったからです。



「がんと向き合う週間」に合わせて車内に掲示されたがん検診受診の啓発ポスター

生存率が同じ人でも人生への考え方は違っています。医師が「がん治療医が生存率うんぬんで情報を提示したり、しなかったり

イミングで伝えることがいかに大切かを確信し、また、真摯に議論される医療者の姿に、滋賀県のがん治療に希望を感じた講演会でもありました。

県が定めた2月4日からの「がんと向き合う週間」が終わりました。4日は公立甲賀病院でがん患者作品展。8日は「が

んになっても安心して働くことをめざして」をテーマに県のがん対策啓発イベントとがん医療フォーラム。「がん」と就労」について患者の立場から発言しました。

県は確実にがん対策を進めています。春には県のがん情報提供のサイトも立ち上がります。すで

生存率は生き方の物差しではない

「がん検診受診の啓発ポスター」と発言しました。受けるかどうかは患者本人が情報を咀嚼して判断するのであって、知らされなかった後悔ほど辛いものはないと思ったからです。

生存率が同じ人でも人生への考え方は違っています。医師が「がん治療医が生存率うんぬんで情報を提示したり、しなかったり

供にバイアスをかけるべきではありません。現に乳がん治療では、1998年に米国で認可された分子標的治療薬(ハーセプチン)の恩恵にあずか

するのほ上から目線の発言ではないかと苦言を有り難かった。私の心は拍手していました。生存率はがん患者の命の物差しかもしれないが、その人の生き方の物差しではありません。

正しい情報を適切なタイミングで伝えることがいかに大切かを確信し、また、真摯に議論される医療者の姿に、滋賀県のがん治療に希望を感じた講演会でもありました。

県が定めた2月4日からの「がんと向き合う週間」が終わりました。4日は公立甲賀病院でがん患者作品展。8日は「が

んになっても安心して働くことをめざして」をテーマに県のがん対策啓発イベントとがん医療フォーラム。「がん」と就労」について患者の立場から発言しました。

県は確実にがん対策を進めています。春には県のがん情報提供のサイトも立ち上がります。すで